

〈社会活動報告〉

仙台市立中野小学校におけるESD・環境教育支援活動

東聖史

東北学院大学大学院学生

I. はじめに

地球温暖化はじめ異常気象の頻発、生物多様性の消失など、私たちの世界はいま、深刻化する環境問題の中にある。それらの緩和および解決は、国際社会がかかえる最も重要な課題の一つであり、日本を始め世界各国でさまざまな政策や取り組みが実施されてきた（稲生ほか，2009）。

こうした状況下、教育の力にも大きな期待が寄せられるようになり、特に子どもに対する環境教育の重要性が広く認められるようになってきた（太町・中野，2005）。学校や地域を拠点とした環境教育の進め方が議論・検証され、また「ESD」（Education for Sustainable Development；持続可能な発展のための教育）の在り方が強く意識され始めた・・・従来の環境教育からESDへの転換、および現行教育体系の見直しが必要とされている（佐藤，2009）。

本稿では、①地域の自然を活かした環境教育に長年取り組んできた仙台市立中野小学校の活動概要と、②同校で筆者が約1年半にわたって継続した教育支援活動について報告する。

なお、本稿執筆後の2011年3月11日、東日本は未曾有の激震と津波に遭遇し、仙台市立中野小学校とその学区、蒲生干潟の状況は大きく変貌した。筆者の思いは混沌として未だ整理されていないが、そこで育まれた生き生きとした環境教育活動の一端を記録に留めるべく、そして被災された皆さんに笑顔と安らぎが少しでもはやく戻ることを願って、ほぼ原文のままこの小文を掲載するものである。

II. 仙台市立中野小学校の環境教育

1. 概要と歴史

仙台市立中野小学校（以後、中野小と略記）は、仙台市北東部の宮城野区中野に位置し、南は七北田川、東は徒歩10分という距離で蒲生干潟および太平洋に面している（図1）。全校児童159名に対し教職員24名、各学年1学級で構成されている（2010年5月1日現在）。校木は「杉」。また、かつて蒲生干潟周辺の砂浜を繁殖の場としていた夏鳥「コアジサシ」（写真1）を学校のシンボルバードとしている。



図1 蒲生干潟と中野小学校付近（Google Earth）



写真1 コアジサシ

学校の創立は1873(明治6)年で、誓渡寺に開校。以来137年の長い歴史の中で、児童数の増加や仙台新港の建設などによって、過去数回移転を余儀なくされた。現在の土地に校舎が移ったのは1971年のことである。この時は分散併合による廃校の計画もあったが、地域住民の熱心な請願により、小規模ながら独立校として存続することとなり、今日に至っている(仙台市立中野小学校, 1987)。

2. 自然とふれあう環境教育

1) 蒲生干潟とのかかわり

七北田川の河口左岸に広がる蒲生干潟は、奥行き860m, 最大幅250m, 冠水面積13haの潟湖で、そのうち地表が冠水・干出を繰り返す領域の面積は約5haである(蒲生干潟自然再生協議会, 2006)。砂浜, 干潟, 潟湖, 河口, 塩性湿地, クロマツ海岸林といった多様な景観要素が比較的狭い場所に集積しており, 蒲生干潟の北西部は淡水の養魚場, 北部は仙台港に隣接している。

蒲生干潟は多くの鳥類や魚介類, 底生生物の生息地として知られ, その豊かな生態系については, これまで数多くの学術調査・研究がなされてきた(蒲生干潟自然再生協議会, 2006, 蒲生を守る会, 2004)。蒲生を守る会(2008)によれば, 蒲生干潟とその近隣でこれまでに観察された鳥類は, 274種にのぼり(2008年12月現在), シギ・チドリ類については55種と, 全国で観察されたシギ・チドリ全種の74%に達する。

一時は仙台港建設に伴って, 蒲生干潟全面を埋め立てる計画もあったが, 環境保護諸団体による運動や自然保護を求める世論の高まりによって中止された。その後, 1973年には蒲生干潟とその近隣48haが, 宮城県仙台湾海浜自然環境保全地域および鳥獣保護区特別保護地区に指定され, 1987年に後者が国設に移管されている(国指定仙台湾海浜鳥獣保護区蒲生特別保護地区)。

中野小では, 校舎が現在の場所に移転して以来, 蒲生干潟を主なフィールドとして, 地域の自然を生かした教育実践が展開されてきた。校舎2階の

外壁に大きく掲げられている「野鳥と自然を友だちに」というスローガンからも, その校風をうかがい知ることができる(写真2)。以後, 中野小における代表的な環境教育活動を, 筆者自身の視点を織り込みながら, いくつか紹介したい。

2) バードスタディ

春と秋の年2回, 生活科および総合的な学習の一環として行なわれているバードスタディは, 中野小の環境教育における中心的な活動として位置づけられている。地域の自然や野生生物への関心を高め, 地域への郷土愛と自然を愛する心を育てることがねらいとされている(仙台市立中野小学校, 1987)。通常2学年ずつ3日に分けて行われ, 蒲生干潟のすぐ近くにある元祖日本一低い山「日和山」から, 干潟を訪れた鳥類を観察する(写真3)。子どもたちは, 入れ替わり立ち替わり食い入るようにレンズの先を見つめ, 各自持参した図鑑『蒲生干潟の野鳥』(元教員らが過去に作成)を手を, 真剣にメモをとる姿が見受けられる。



写真2 校舎2階に掲げられたスローガン
(2010.5.31 筆者撮影)



写真3 バードスタディで野鳥の観察
(2010.9.30 筆者撮影)

バードスタディの活動は、野鳥の観察だけにとどまらない。実際に干潟に足を踏み入れ、野鳥の餌となるカニや魚といった魚介類および底生生物の観察・採取も行う。五感を十分に使い、干潟の自然に溶け込んでいく子どもたちの姿が印象的である。これはまさに、環境教育に必要不可欠な「原体験」を重視した活動であるといえる。

3) クリーン蒲生

クリーン蒲生は、年に1度、地元の老人クラブやPTAとともに海岸清掃を行う中野小の全校行事である。全学年混合の縦割りグループで、約30分間、海岸および干潟周辺のゴミを拾う(写真4)。本来、鳥の営巣地として利用されるはずの砂地には、海から漂着したゴミが常に数多く散乱している。中野小のシンボルバード「コアジサシ」も、かつてはここを繁殖の場としていた。しかし残念なことに、過去20年近く、彼らの営巣は確認されていない。大量のゴミの存在もその理由の一つであると考えられている。コアジサシを蒲生の地に呼び戻し、その美しい自然を守り続けるため、子どもたちは毎年熱心に活動に取り組んでいる。



写真4 クリーン蒲生の活動
(2010.6.15 筆者撮影)

4) サケ特別採捕・稚魚放流

中野小では毎年、「七北田川の水質を守る会」の協力の下、七北田川で遡上してきたサケの特別採捕を行っている(写真5)。対象は5・6年生となっており、サケの地引き網体験として2学年合同で冬の始めに実施される。守る会の方々のお話や体験活動を通して、七北田川の環境を保全す



写真5 サケ特別採捕／地引き網体験
(2009.11.30 筆者撮影)

ることと命を伝えることの大切さを学ぶことをねらいとしている。

捕獲したサケはその場で採卵し、すぐに受精が施される。守る会の方々が行う一連の作業を真剣な表情で見つめる子どもたちの姿がある中、「かわいそう」などといった気持ちから、思わず両手で顔を覆ってしまうといった仕草も見受けられる。

受精卵は、その後学校へ持ち帰って飼育し、翌年、育てた稚魚を七北田川の河口で放流する。この過程を通して、子どもたちは生命の力強さやほかなさ、あるいは自然界の厳しさといったものを、改めて感じることになる。

5) 葦紙すき

蒲生干潟とその周辺には、イネ科の高茎植物である葦(ヨシ、アシ)が広く分布している。これを資源として利用し、その価値を見直す目的で行われている活動が、「葦紙すき」である。以前は、子どもたちが作成した葦紙をそのまま卒業証書に使用するという試みも実施されていたが、作成には非常に手間がかかる上、文字がはがれ落ちてしまうといった問題も生じたため、現在では行われていない。

3. 環境教育推進校としての歩み

先にも述べたように、中野小が蒲生干潟をフィールドとして環境教育に取り組むようになったのは、校舎が現在の場所に移転した1971年以降のことである(仙台市立中野小学校, 1987)。そ

の取り組みは当初から活発で、干潟の全校清掃や愛鳥教育が表彰を受けた経緯もある。1985年度には、「ふるさと教育」の一環として収集されてきた地域の自然・地理・歴史に関する素材を集大成した副読本『わたしたちの中野』を発刊した。この副読本は、現在も中野小の環境教育の場にしばしば教材として登場する。

1986年度から1987年度にかけて、中野小は仙台市教育委員会から研究校指定を受け、本格的に地域の自然を生かした環境教育に取り組むこととなった。「自然に学び、自然を愛する心を育てる指導の試み」という主題の下、地域素材の教材化を通じて「地域に根ざす教育」の研究および実現に力が注がれた。その成果は、『仙台市立中野小学校 昭和61・62年度 研究紀要』として今に引き継がれている。

研究校に指定された2か年度が過ぎた後も、中野小では校内研究として引き続き、地域に根ざした環境教育の取り組みが精力的に推進された。それを物語るように、表1に示す数々の賞を受賞している。

校内研究としての環境教育の取り組みは、2002

表1 環境教育・自然保護活動に関する中野小学校の主な受賞経歴。

| 年度 | 受賞内容 |
|------|---|
| 1988 | 環境省・日本鳥類保護連盟主催 第23回全国鳥獣保護実績発表大会 環境庁長官賞 |
| 1993 | 日本児童教育振興財団主催 第1回全国小学校環境教育賞 優秀賞 |
| 1994 | 環境省・日本鳥類保護連盟主催 第48回愛鳥週間全国野鳥保護のつどい 文部大臣奨励賞 |
| 2000 | 日本石鹼洗剤工業会主催 第13回環境美化功労団体表彰 地球ピカピカ大賞 |
| 2001 | 環境省・日本鳥類保護連盟主催 第36回全国野生生物保護実績発表大会 環境大臣賞 |

年度まで続けられた。同年度末には、仙台市教育委員会から、「杜の都のエコ・スクール」に認証されている。しかしその後、環境教育という言葉は研究主題から姿を消し、それと同時に、中野小の環境教育における精力的な活動にも衰退の傾向が表れ始める。この背景には、全国的に「確かな学力」の育成が強く求められるようになったことが深く関係していると考えられる。

そういった状況の中で、中野小は2008年度、宮城教育大学のはたらきかけにより、仙台市立の小学校として初めてユネスコスクールに加盟した。その影響は大きく、翌年には県内外の加盟校と交流も生まれた。2010年度には、実に7年ぶりに、環境教育が校内研究の主題として復活し、学校全体でその活動に取り組むための素地が整えられた。研究の概要および具体的な取り組みの内容に関しては、Ⅲ章で述べることにする。

4. 筆者と中野小のかかわり

ここで、簡単に筆者と中野小のかかわりおよびその経緯について述べておきたい。筆者が初めて中野小を訪れたのは、2009年6月、春のバードスタディが行われた日であった。当時、筆者は完全な部外者でありながらも、環境教育を学ぶ一学生としてその活動に参加させていただき、蒲生干潟の自然はもちろん、生き生きとした子どもたちに間近で接する機会を得た。豊かな自然環境の中、無邪気に、そして純粋に活動を楽しむ彼らの姿を見て、筆者自身実に大きな感動を味わったことを今でもはっきりと覚えている。

中野小との出会いは、インターネット上で同校のウェブサイトを見つけたことがきっかけであった。自らの子ども時代の経験から「小学校の環境教育」に関心を抱いていた筆者は、身近にそのような取り組みを行っている小学校があれば一度足を運んでみたいと考えていた。検索を始めてから、実績ある中野小の取り組みを見つけるまでに、さほど時間はかからなかった。

渡り鳥の飛来地「蒲生干潟」との出会いが生ま

れたのもその頃であった。筆者にとって幸運であったのは、当時「蒲生干潟自然再生協議会」の下部組織「環境教育・市民参加検討部会」がちょうど動き出すという時期にあり、そこに筆者の卒論指導にあたる平吹教授と中野小の阿部教頭先生が、ともに委員としてかかわっていたことであった。第1回部会に傍聴者として参加した直後、筆者は教授の仲介によって中野小との関係の第一歩を踏み出すことができた。

その後、筆者は先に述べた春のバードスタディを始め、夏の野外活動や秋のクリーン蒲生活動などに、「同校の環境教育に関心を持つ一学生」として参加させていただいた。学校教育現場が閉鎖的・保守的とも評される折、こうした活動に巡り会えたことは、当時筆者が感じていた以上に貴重で、有り難いことであった。

中野小との関係に大きな変化が訪れたのは、同年10月のことであった。中野小からの要請をきっかけに、筆者は「学校支援ボランティア」として週1日、同校に通うようになった。この制度は、市立学校からの要請を受けた仙台市教育委員会が、県内の協力大学に在籍する学生をボランティアとして派遣する「学生サポートスタッフ・人材バンク事業」を活用したものである（仙台市教育委員会、2009）。学校教育に関心を持った学生を現場に派遣することで、教育活動をより活発化させ、子どもたちの「生きる力」を育むことがこの事業の大きな目的のひとつでもある。

筆者はそれ以来ほぼ毎週中野小に通い、通常授業の補助スタッフや子どもたちの遊び相手として活動した。また、決まった曜日以外にも、環境教育関係の行事がある場合は、足を運ぶように心がけてきた。この定期的・長期的活動が、結果的に、中野小の教職員や子どもたちとの親密な関係を育んだと感じている。もちろん、筆者自身もこうした貴重な経験を通してさまざまなことを学び、楽しみながら、それらを自らの成長の糧としてきた。

最初の訪問から1年半が過ぎ、筆者は現在、中野小のスタッフに準じるような立場で活動させて

いただいている。教職員の方々には大変良くしていただき、また「東さーん！」と飛びついてくる子どもたちも少なくない。具体的に筆者が中野小の環境教育とどのようにかかわってきたか改めて次章で述べていきたい。

Ⅲ. 校内研究「子どもの心を動かす環境教育とESD」

1. 校内研究の概要

中野小が2010年度から2年計画で取り組んでいる校内研究「子どもの心を動かす環境教育とESD」には、①従来の環境教育の実践を見直して、「これからの環境教育」としてのESDの在り方を探るという課題に加え、②蒲生の素晴らしい自然環境を活かし、そこで自らが感じたことや学んだことを「言葉で伝える力」を、子どもたちに身につけさせたいというねらいがある。

研究主題の決定には、2008年度のユネスコスクール加盟に伴い、ACCU（ユネスコ・アジア文化センター）から環境教育やESDの進め方について支援を受けるようになったことも深く関係している。また同校には、過去に勤務した教師らが残していった豊富な資料・教材も存在する。こうした実績を踏まえた上で、中野小は生活科・総合的な学習の時間に実施されてきた環境教育について研究する方向性を打ち出した。蒲生干潟や七北田川の自然を守りながら、人と自然が共存していくことの大切さをどのように子どもたちに伝えていけば良いのか、蓄積されてきた資料・教材を整理し、他教科・他領域との関連を明確にしながら、学習で扱う内容を厳選する作業が続けられている。

2. 校内研究の実践と子ども・教師の変容

1) 環境教育・ESDの実践計画の策定

体験的な活動を通して学習者の思考力・判断力・表現力を育むことができ、なおかつESDの展開を意識した実践をめざして、中野小では改めて学習構造（表2）と「総合的な学習の時間」の年間計画を策定した（仙台市立中野小学校、2010b）。

表2 中野小学校における環境教育・ESDの構造概要

| 学年 | 大単元／具体的な活動 | 教科との関連 | 伸ばしたい力 |
|----|-----------------------------------|--------------|---------|
| 1 | 「干潟で遊ぼう」原体験活動。自然に触れる。 | 国語 生活 図工 | 話す |
| 2 | 「干潟と仲良く」見たもの・触れたものを絵や言葉で表現する。 | | 聞く |
| 3 | 「干潟のひみつ」干潟全体の様子を把握し、伝える。 | 国語 社会 理科 | 調べる |
| 4 | 「干潟の生物と人間」水とゴミと自分たちの生活を考える。 | 図工 | 伝える |
| 5 | 「干潟を成立させるもの」生命の誕生。森林の働き。 | 国語 理科 算数 | 調査・比較 |
| 6 | 「干潟から世界へ」生命のつながり。情報交換 未来の干潟の姿を提案。 | 図工 家庭科 外国語活動 | 伝える つくる |

「子どもの心を動かす環境教育とESD」（仙台市立中野小学校、2010）を基に作成。

その結果、各教科間の螺旋的なつながりや学校目標とのかかわりが一層可視化され、環境教育・ESD活動全体を俯瞰しやすくなったという。

2) ACCUによる支援事業の活用

中野小がユネスコスクールに加盟し、ACCUとのかかわりをもったことにより、環境教育・ESDを課題とする国内外の教員交流プログラムや研究会、実践報告会に参加する機会が増加した。これによって、参加した教師自身が見聞を広め、教育実践に対する意識を高めるとともに、中野小にその成果を持ち帰り、また他校との新しいネットワークも構築されたという（仙台市立中野小学校、2010b）。

さらに2010年度には、中野小の環境教育・ESDを一段と充実させ、研究成果を児童に還元する取り組みも進められた。それは、①「日本／ユネスコ パートナーシップ事業」の下でACCUが実施している「学校&みんなのESDプロジェクト」への参加と、②蒲生干潟における研究成果を凝縮した下敷き兼用の「干潟観察カード」の作成である。

「干潟観察カード」の作成にあたり、蒲生干潟で観察できる鳥類や底生生物の写真提供が筆者にもたらされた。普段から蒲生干潟に足しげく通い、さまざまな生き物の写真を撮り溜めていたことが役立った。

3) 学校間交流

2009年度から中野小は、ACCU主催の各種プロジェクトを通じて構築したネットワークを活かして、他校との交流を活発化させている。その年、当時の5年生は気仙沼市の小学校と作品交流を行った。双方の子どもたちが、自分たちが住む地域の自然、あるいは学校で取り組んでいる活動について作文などにまとめ、交換した。この交流を通して、中野小の子どもたちは自らの活動を客観視し、それまで「あたりまえ」と感じていた蒲生干潟の自然の素晴らしさや希少性を再認識するきっかけを得たようである。

2010年度に実施された学校間交流として、韓国・ソウル特別市の小学校との交流授業があげられる（写真6）。これも、ACCUのプロジェクトを通して教師間のネットワークが構築されたことによって計画・実現されたものである。この時は、通信手段としてSkypeが用いられ、宮城教育大学の韓国人留学生3名が通訳を担当した。また、筆者もボランティアスタッフとして活動の補助に入った。

この交流授業では、居住地域や学校活動に関する発表を相互に行った。中野小の子どもたちは、仙台市の概要を紹介した後、蒲生干潟とその周辺の自然環境、学校あげてのふれ合い・探求・保全活動について発表し、自らの想いも語った。また、伝統ある和太鼓やリコーダーの演奏も披露した。



写真6 Skypeを用いた韓国の小学校との交流授業（2010.11.5 木田武宏撮影）

韓国の子どもたちからは、学校全体で取り組んでいる環境保護運動や問題解決学習（PBL）に加え、韓国の文化やソウル特別市の象徴とされるキャラクター「ハッチ」について紹介がなされた。

中野小の子どもたちは、この日を大変心待ちにしていたようで、インターネット回線が繋がった瞬間からその目をキラキラと輝かせていた。

交流授業以前からクラス間で手紙のやり取りをしていたこともあり、教室内は当初からかなり打ち解けた雰囲気になっていました。授業中も相手の発表を真剣に聞き、また自分たちの言葉で、はっきりと物事を伝えようとする彼らの姿が印象的でした。

4) 地域人材の活用

地域の人材活用に関する2010年度の取り組みの一つとして、春のバードスタディに仙台市科学館の先生方3名を講師として招いたことがあげられる。2・5年生の活動日に来校され、指導・支援がなされた。

2010年6月11日、2年生の活動課題は「干潟に生息する水生生物の観察」であった（写真7）。講師が組み立てた学習プログラムにしたがい、水辺や葦原の生き物を観察しながら、解説を聞き、干潟や生物に対する関心・理解を深めた。多少の個人差はあるにせよ、子どもたちは初めて目にする生き物やその生態に興味を膨らませながら、それぞれの体験活動を楽しんでいるようであった。

5年生の活動には、蒲生潟のCOD（化学的酸

素要求量）測定が盛り込まれた。彼らはその後の野外活動で、蒲生干潟に注ぐ七北田川の水源地・泉ヶ岳を訪問し、同様の水質検査を行った。

サケの採卵・稚魚放流も行っている七北田川の上流と河口で、水辺環境や水質の比較がなされた。

中野小では、学生ボランティアとのかかわりも、地域人材の活用として位置づけられている。上述した「干潟観察カード」の作成や各種学習活動における補助もそれにあたる。また、筆者が同校に提供し、現在校舎1階の廊下に掲示されている「蒲生干潟の自然とその保全活動」について紹介したポスターも（写真8）、学習補助教材として役立っている。これは元々、筆者がゼミ活動について大学祭で発表するために作成したものであった。

こうした活動とは別に、2010年度、筆者は学生ボランティアとして、全校児童の前でお話をさせていただく機会をいただいた。それは、夏休み前最後の全校朝会において、中野小のシンボルボード「コアジサシ」の暮らしを紹介するというものであった。

事の発端は、その朝会の約2週間前にさかのぼる。筆者は、本稿末で簡単に触れる『蒲生干潟クイズ』の作成を視野に入れ、自身および中野小児童のほとんどが未だ実見したことのないコアジサシを観察し、その姿を写真に収めるべく、蒲生干潟の約30km南方に位置する「わたり吉田浜海岸」へと向かった。そのコアジサシ営巣地に辿り着いた時、筆者はしばし言葉を失った。砂浜海岸を俊



写真7 蒲生干潟で採取した生き物をその場で観察
(2010.6.11 筆者撮影)



写真8 廊下に掲示された筆者作成のポスター
(2010.12.13 筆者撮影)

敏かつ華麗に飛び交うコアジサシとの出会いに、何事にも代え難い感動を覚えたのである。程なくして中野小の職員室でこの話をすると、「ぜひ子どもたちにも聞かせてあげて欲しい」、「実際に東さんが撮った写真なら、彼らにもきっと良い刺激になる」との要請をいただいた。筆者はこれを喜んで引き受けた。

当日は、あらかじめ準備したスライドを用いて発表を行った(写真9)。子どもたちの反応はとても良く、学校のシンボルボードに強い愛着を抱いていることがうかがえた。やはり彼らにとってコアジサシは特別な存在なのであろう。朝会終了後、「おもしろかった」という言葉をかけてくれる児童もいた。驚いたことは、それから約1か月後の夏休み明けに、「夏休みに、亘理に行ってコアジサシを見てきた!」と報告してくれる児童が複数名いたことである。その時初めて、朝会発表の成功を実感した。



写真9 コアジサシについてお話しした全校朝会の様子
(2010.7.20 中野小学校・竹下修央教諭撮影)

5) 報道機関の活用

ここ数年、中野小の環境教育活動がテレビや新聞で報道される機会が増えている。各種の体験学習を実施する際、学校側がマスコミ各社に取材案内を行っていることも有効に機能しているようにみえる。子どもたちの活動の様子が報道されることによって、地域住民に新たな関心や会話が生まれる。そして子どもたちは、中野小の取り組みが多くの人々に知られていることを感じ取って、学

校に対する帰属意識を高め、自分たちの学校に誇りと自信を持つようになったという(仙台市立中野小学校, 2010b)。テレビカメラの前でインタビューに応じるという経験も、多くの子どもたちにとっては特別なものであろう。こうした経験を機に、日常生活で目にするさまざまなニュースや、同じような活動を行っている学校に対して、関心を持つようになった児童も少なくないという。

中野小の学区内には、同居する祖父母の代から同校の出身という家庭が多く、母校に対する関心も高いため、各種報道による効果は非常に大きい。また、現在、中野小に通学する子どもや孫がいない家庭からも、報道後、教育活動に対する評価が寄せられるという。

筆者が初めて中野小を訪れた際も、河北新報の記者が1名、バードスタディの取材に訪れていた。学校が送付した案内書中に、「環境教育を学ぶ学生も参加する」という旨の記述があり、筆者も個人的に取材を受けた。後日発行された同紙の夕刊には、「環境教育 学生飛び入り」という見出しとともに、中野小における環境教育の概要とその歴史、筆者自身の取り組みや取材中の発言が掲載されていた。この記事を通して、中野小と筆者それぞれの活動の目的・内容および両者の関係について、地域の方々にも理解が広がったように感じている。

学習者のモチベーションの向上や地域とのかかわりの強化も視野に入れながら、中野小では今後も積極的に各種報道機関への情報発信を進めていくとのことである。

3. 今後の見通し

Ⅲ章の冒頭でも述べたように、中野小の校内研究「子どもの心を動かす環境教育とESD」は、2年計画で進められている。「環境教育」という研究領域については少なくとも過去7年間のブランクがあり、また新たにESDの観点も加わったことから、研究年次最初の2010年度は「課題を見つける1年」になるであろうとの見方がなされてきた。これまで輝かしい成果をあげた教育実践に基づい

て、ESDのさらなる発展が期待される。その一例としては、「サケの回遊をモチーフとした、環太平洋規模の学校間交流」が構想・検討されている。中野小では、2011年度もユネスコスクールのネットワークや外部支援を最大限に活用しながら、子どもたちの「環境を思いやる心」を刺激し、「全体的・総合的な領域にわたる学習意欲の向上」に繋げていきたいとしている。

Ⅳ. おわりに

さまざまな教育活動の支援や学習教材の作成など、中野小における約1年半の活動を通して、筆者は実に多くのことを経験し、同時に小学校における環境教育実践のありようについて学びを深めることができた。また、小学校に対しても、スクールボランティアたる一大学生として、ささやかな貢献と刺激を与えることができたと考える。筆者は今後も同校とのかかわりを維持しながら、その取り組みを見守っていきたくて考えている。

2010年度、筆者が中心となって実施した社会的活動として、環境教育支援教材『蒲生干潟クイズ』の作成（杜の都の市民環境教育・学習推進会議助成事業）がある。小学生を主対象としたこの教材は、蒲生干潟に関して、その自然・歴史、環境保護団体や自治体の取り組みをクイズ形式でまとめ、冊子にしたものである。作成の背景には、蒲生干潟の「今」をまとめた新しい教材を求める中野小からの要請や、物理的には近距離にあるものの、蒲生干潟の自然をあまり知らない児童が多数存在することへのもどかしさがあった。今後は、「中野小ESD」への更なる貢献を視野に入れながら、『蒲生干潟クイズ』を用いた具体的な環境教育プログラムの開発に力を注ぎたい。

謝辞

教育支援活動をお認めいただくとともに、終始あたたかいご指導・ご支援を賜った仙台市立中野小学校の伊藤公一校長先生、阿部みゆき教頭先生、庄司聡先生、松下武士先生はじめ教職員の皆さまに心か

ら御礼申し上げます。また、これまでの活動において、資料提供や多くの助言、激励、および温かいご指導をいただきました、「蒲生を守る会」代表の熊谷佳二先生、「クリーンアップ蒲生」代表の伊藤実様、「蒲生干潟自然再生協議会／環境教育・市民参加検討部会」事務局の仙台市環境局環境部環境都市推進課、杉野目陽子様、そして同協議会を構成される各委員および事務局の皆さまに、改めて感謝申し上げます。最後に、指導教員として終始ご指導いただき、本原稿を校正いただいた東北学院大学・教養学部・地域構想学科の平吹喜彦教授に感謝申し上げます。

引用文献

- 蒲生干潟自然再生協議会. 2006. 蒲生干潟自然再生全体構想. pp.1-9. 宮城県自然保護課. 仙台.
- 蒲生を守る会. 2004. 蒲生海岸鳥類生息調査結果1971-2003. 80pp. 仙台.
- 稲生勝・岩佐茂・大日方聰夫・吉埜和雄(編). 2009. 『環境リテラシー：市民と教師の環境読本【第2版】』. 129-176. リベルタ出版.
- 稲生勝・岩佐茂・大日方聰夫・吉埜和雄(編). 2009. 『環境リテラシー：市民と教師の環境読本【第2版】』. 29-86. リベルタ出版.
- 環境省東北地方環境事務所. 2010. 国指定仙台海浜鳥獣保護区自然観察ガイド. 2pp. 仙台.
- 佐藤真久. 2009. 環境教育からESDへの展開. 2009. 『持続可能な社会のための環境教育シリーズ [1] 現代環境教育入門』(降旗信一・高橋正弘編著／阿部治・朝岡幸彦監修). 115-132. 筑波書房.
- 仙台市教育委員会. 2009. 平成21年度 学生サポートスタッフ・人材バンク事業要項. 1pp.
- 仙台市立中野小学校. 1987. 昭和61・62年度 研究紀要 自然に学び自然を愛する心を育てる指導の試み - 地域素材の教材化を通して -. 6pp.
- 仙台市立中野小学校. 2010a. 平成22年度学校要覧 野鳥と自然を友だちに: わたしたちの中野小学校. 2pp.
- 仙台市立中野小学校. 2010b. 共同研究「子どもの心を動かす環境教育とESD」. 5pp.